

理系国語

現代文

問一

「漢字は読みをカタカナに、それぞれ改めよ。」という設問条件に対して、読みをひらがなで解答した受験者が多かった。もちろん、ひらがなの解答は、すべて不正解とした。

各設問では、a「鎮魂」、b「抵触」、g「薄」の誤答が多かった。a「鎮魂」は、「鎮」を「沈」「珍」とする誤り、「魂」を「塊」とする誤りが目立った。b「抵触」は、「抵」を「低」「提」「定」「停」とする誤りが目立った。また、「呈色」とするものも多かったが、この文脈には当てはまらないので注意しよう。g「薄」は、字形の誤りが多かった。「薄」のさんずいは、必ずくさかんむりの下に収めること。また、右上に付ける点を書き忘れているものも目立った。

問二

この設問では、「たかが……、されど……」の構造を生かしつつ、その意味を説明する必要があった。つまり、慣用的な語句について、それを本文に即して言い換えるということである。本文の傍線部①の直前にある、「外見を考えることは、日常における他者との出会いや他者理解を考えるうえで、とても重要な営みだ」という部分を使って、「どういうことか」の説明をしてしまっている答案が多かったが、それでは、この設問の主旨に少し外れるのである。あくまでも、「たかが……、されど……」の構造に基づいて、「内面・中身は重要だ」を前提として解答をまとめるべきであった。

問三・四・五

この三つの設問の答案に共通しているのは、本文の「」、“(””など括弧付きの語句を、安易に取り込んでしまった答案が多く見られたことである。括弧付きの語句を記述に用いる際には、細心の注意が必要である。引用を表すなど特別な場合を除いて、原則として、記述には括弧は用いないほうがよい。それは、本文に用いられている場合も、そうでない場合も同様である。制限字数の都合などで、用いなければならない場合もあるが、その場合でも、括弧そのものは記述に含めず、括弧を外した状態で用いるようにしよう。

問三では、“距離”を、そのまま（括弧付きで）用いた答案が目立った。この“距離”を答案に取り入れる際には、物理的な距離なのか、そうでないのかを示す必要がある。制限字数内で説明できないようなら、この語句を用いない説明の仕方を考えるべきである。「道具」も同様。この語句も、どのような道具なのかを示す必要がある。

問四では、問三と同じく“距離”を用いた答案が目立ったが、この設問では、筆者が「なぜ『困ってしまう』のか」をまとめるものなので、問三以上に「どのような距離なのか」を詳説しないと、筆者が困る理由につながらないだろう。この設問は指定字数に余裕があったはずなので、安直に括弧付きのまま放置せず、しっかりと説明すべきであった。

問五では、“膜”について一般化して説明している答案は皆無であった。この設問では、“膜”の一般化を必須としたので、残念ながら、満点答案はみられなかった。解説でも述べたが、この“膜”は比喩表現である。比喩のままでは説明にならない。この“膜”が物理的なものではない、心理的な境界を意味するということが答案に盛り込んでほしかった。実際の入試においても、比喩表現を記述に取り込む際には、細心の注意をはらおう。

問六

カを選んでしまう誤答が見られた。正答のイは、悩みなく選べたようだが、正答のオは、カと迷ってしまったのだろうか、選べていない答案も見られた。カの「人々は自らの表層と人間性を整えて行為する」は、本文の「自分の人間性や内実などに関係なく、……ふるまう」と矛盾していることに気づいてほしかった。